

農山村の民家と暮らし——和歌山県下2地区を事例に——

第1報 住生活について

Traditional Farm Houses and Living in Mountain Villages—In the Case of Two Districts in Wakayama Prefecture—
(Part 1) Housing Life

深 渡 直 子 梅 原 清 子
Naoko SHINDO Kiyoko UMEHARA

2005年10月11日受理

I はじめに

戦後60年の社会経過は、私たちの生活を根底から変えてしまった。生活の諸要素は分断され、つながりある生活としてとらえにくくなっている。たとえば、日常使う水は取水や排水の過程が見えない、自ら住んでいる住宅が作られる技術や寿命については不明なことが多い点などがそうである。昔の人なら当たり前のこととして承知のことかもしれない、しかし急速に失われつつある現代である。快適で便利な環境が実現されるいっぽうで、忘れ去られ失われていくものは数多い。昔の生活の何が良かったのか考え、今の生活に受け継いでいくこと、それがこれからの生活を発展させ保証することにつながるといえよう。生活文化の視点で今の暮らしを見直してみると、あたりまえと思って見過ごしていることが見えてくる。そこで、昔のつながりある暮らしが残っていると考えられる地域を訪れ、その生活のあり方を検証することとした。

第1報では、山村における住生活の現状を把握するとともに昔の生活の記憶について掘り起こし、考察し、記録に留めて今後への資料としたい。また第2報では、住生活の中でも特に特徴的であった「水」をとり上げ、その利用と処理について明らかにする。

II 研究方法

1 調査対象

本研究の調査対象地は、和歌山県有田郡清水町遠井（以下、T地区）と、同日高郡龍神村丹生ノ川（以下、N地区）の2地区である。両者は典型的な山間地であり、それぞれ有田川、日高川の支流最上流部に位置し、気候も似ているため、生活様式も共通性がみられると考えた。その反面、産業・経済圏や地域社会の違いが影響する個別性も現れると予想した。T地区5戸（A～E家）、N地区8戸（F～M家）、合計13戸を対象に調査した。調査可能な住戸を選定したため、T地区は1集落、N地区は数集落に及んでいる。

2 方法と時期

各戸を訪問し、調査票に基づいて聞き取り、問取り採取、写真撮影を行った。聞き取りは、昔の生活のあり方を知るため各戸の世帯主夫妻を中心にできるだけ年長者に行うようにした。1戸当たり2時間程度の訪問で、調査員は1～3人であった。調査時期については、T地区2004年9月27～29日、N地区同年10月23～25日である。

III 調査対象地の概況

1 地形・気候

和歌山県は比較的温暖で雨量が多く、面積の大部分は紀伊山系を中心とする1000m前後の山岳地帯で占める。森林に恵まれた地域であるために「木の国（紀の国）」と名づけられたと言われる。調査対象地域はこの紀伊山地に抱かれる深い山間部の農村である¹⁾。

調査対象地区のある清水町は和歌山県の北東部、有田川上流の峻険な山に囲まれた林野率89.3%の町である。その中で、T地区は清水町の北端部に位置し、美里町と接する地域にある。長峰山脈の堂鳴海山の背後から流れる遠井谷川はT地区を経て有田川に入る²⁾。家々は山頂近くの斜面に点在している。

龍神村は和歌山県の中央、東は奈良県に接し、日高川最上流域に位置する。村の林野率95%と大半が森林で占められている。N地区はこの龍神村の南東端部に



図1 調査対象地

あり、奈良県十津川村に発する丹生ノ川の流路に沿って集落が存在する³⁾。

両地域の気候をみると、年平均気温は平野部に位置する和歌山市より3℃以上低くなる。龍神村は13.5℃、清水町は13.7℃であり、年平均気温が最低である高野山の11℃に次ぐ低さである。また、年間降水量は全国平均が1553mmに対し、清水町は1818mm、龍神村は2901mmと多く、特に龍神村は多雨地域であると言える。夏でも夜間は肌寒く、冬には積雪する。(数値はいずれも2000年現在)

2 地域の産業と交流圏

1) T地区

昭和初期には清水町清水—美里町神野市場間に八幡索道と呼ばれる道が開通し、遠井はその中間基地となった。このため今も清水町域と美里町貴志川流域と経済的、社会的結びつきが強い。

清水町では、米作や養蚕を中心に茶や棕櫚、山椒などの林野副産物の生産がなされてきた。とりわけ山椒の生産量は全国一を誇るが中でもT地区のものは良質であると言われる。山椒生産の歴史は古く、すでに10世紀始めの『延喜式』の中で課税対象とされている。後にT地区の医要木勘右衛門宅に大粒の山椒が自生し、これが「ぶどう山椒」と呼ばれて現在も栽培されている品種である。副産物であった山椒が本格的に生産されるようになったのは戦後である。生産量が低下した時期もあったが、近年また回復傾向にある⁴⁾。山椒は山の急斜面の狭い土地でも育てることができる。収穫作業は日雇い労働者の手も借りて一斉に行われる。8月の炎天下、斜面に立って行われるその作業は大変なものである。しかし販売農家として十分成り立つ高収益をあげ、清水町の主要農産物として定着している。

2) N地区

丹生ノ川は、奈良県十津川村に発する川である。この丹生ノ川に沿って古来、道が通じており、十津川—龍神間の交流があった。この他中辺路へと抜ける熊野参詣道も通っていたために県南地域との交流も盛んであった⁵⁾。

龍神村は、日本三大美人湯の一つ、龍神温泉で古くから知られている。生活を支えるのは農業であり、清水町と同じく養蚕や林野副産物の生産が盛んであった。ただし山椒の生産はなされていない。平安時代には松煙墨が作られ、松煙の歴史も古い。また、この地域の産業で忘れてはならないのは紀州材で知られる林業である。初代紀州藩主徳川頼宣は林業保全に力を入れ計画的に森林を育てた。江戸中期からこの地でも木材の伐採搬出がされるようになって以来、林業は主要産業となったのである。木材は丹生ノ川から筏を組んで搬出され、御坊で出荷されたのだった。このため、川上の十津川や丹生ノ川からは木材や山の産物が、川

下の御坊や田辺からは魚や生活物資が、と物資の行き来が盛んであった。ところが林業は戦後の建築ブームにあおられて乱伐が続き、加えて昭和50年頃からの木材の不況によってみるまに廃れていった⁶⁾⁷⁾。現在も、林業不振は続き、農業や椎茸栽培が主流となってきている。しかし、昭和45年の龍神林業開発会議の発足や昭和49年の林業課の独立等、村を挙げて木材の再普及に力を入れようと新しい取り組みもされている。また、昭和62年には、龍神村森林組合、龍神村、農協などによって第三セクターの住宅会社「龍神住宅」が設立され、龍神材をブランドとして定着させるため実際に住宅を売り出している⁸⁾⁹⁾。

3 地名由来

1) T地区

高野山を開いた弘法大師は、水に困っている人々を見て井戸を掘り当てたという伝説が全国各地に残っている。T地区でもこのような弘法大師伝説がある。修行の途中この地に足を踏み入れた弘法大師は喉の渇きを覚え、近くの民家で水を所望した。家人が水を汲みに行ったがなかなか帰ってこない。やっと帰ってきたのでいったい井戸はどこにあるのかと尋ねると、近くに井戸は無いからずっと下手にある井戸まで汲みに行ったのだと言う。弘法大師は、遠くの井戸まで大変だっただろうと感謝し、すぐ近くの草むらを杖で2、3度突くとそこから水がこんこんと湧き出した。以来、この地域は「遠井」と呼ばれるようになったという¹⁰⁾。弘法大師の井戸は現在も「弘法井戸」と呼ばれて大切に生活用水として利用されている。



写真1 T地区に残る弘法井戸

2) N地区

また、N地区の丹生ノ川とは地域を流れる川の名にちなむものである。この「丹生」という地名は全国で見られ、「丹」は「朱」と同義語で、「丹土」、つまり赤土のことである。とくに、神社の朱塗り柱等に用いられる水銀朱が「丹土」と呼ばれ、丹土が産出される(生

まれる)土地は丹生と呼ばれたのである。和歌山県でも、弘法大師にゆかりのある「丹生都比売」をはじめとして丹生がつく土地は多い。「丹生」の地名は河川の源流、水神の祀られる流域を呼ぶことも多いといわれる¹¹⁾。

IV 調査結果および考察

ここでは、調査対象世帯の概要と住まいの移り変わりおよび住まい方について、調査対象地域に特徴的なものを中心に、地域性と関連させながら述べる。住まいの移り変わりは屋根、間取り、土間、設備、の4面からみる。

1 居住者

現在の居住者について、まず家族人数をみると平均2.69人となり、県平均¹²⁾の2.77人に近い。しかし世帯主年齢をみると、50代が2名、残る11名はすべて65歳以上の高齢者であり、かつ高齢者のみの世帯は13戸中9戸を占めている(表1)。高齢化が非常に進行していることがわかる。

どの世帯も農林業に関わりが深く、高齢者とはいえほとんどが現役で働いておられる。とくにT地区は、山椒という地域の特産があり、経営規模の多い人で1千万円を越える租収入を上げられている模様である。他にもあらゆる林野副産物を作っている。対してN地区の対象者は、元もと教師退職者や団体役員が多いこともあって、耕作を人に頼む例や自給的農業に限られる場合もある。農作物のほかにはチャボや鯉の飼育がされていた。両地区の代々の生業については、林業が栄えた戦後の一時期までは12戸が林業に携わり、その傍ら3戸が大工をしていたという。昭和30年以降の林業不振により、仕事の内容も大きく変化したものとみられる。

後継者については、次世代同居の有無によりみるならば、前述のように9戸までが別居である。ただT地区では世代構成が比較的安定している。これは、農業経営の安定していることと関わっているといえよう。後継者がいる場合、住生活も近代的なものに変えられていく可能性が高いが、いない場合、住み慣れた環境を変えたくない、もしくは変える必要が無い。このため、後継者の有無は住生活に大きな影響を与えると考

えられる。

2 建築時期

調査対象家屋の母屋建築時期は表2の通りであった。最も古いA家は、江戸時代の文化文政年間(1818~1830年)に火事で家屋が全焼したため建て替えられて以来、約200年住み継がれてきた。G、I、K家も言い伝えによると、江戸時代後半に建てられたと推定される。和歌山県に現存する民家は最古のもので1706年であり、隣接する大阪府や奈良県に比べて約1世紀も新しい。特に県南に行くほど造りは簡素で新しいものとなる¹³⁾。このような中、T地区やN地区は、県下では比較的古い様式を留める民家が残存する貴重な地域と言えるであろう。

3 屋根

日本は南北に長いので、気候風土条件によって大きな地域差が見られることも伝統的民家の魅力でもある。気候が建物の造りに影響を与える最も大きな部分の一つが屋根であろう。日本の降水量は西欧の2倍以上ある。このため日本民家の屋根は、雨水を排除しやすい切妻、寄棟、入母屋のような傾斜のある屋根を基本として、変化に富んでいる。

屋根材に関しては、現代の和風建築の多くが瓦葺であるが、一般住宅に瓦が普及したのは明治時代以降である。特に山間部の農村は草葺や板葺きが近年まで圧倒的であった¹⁴⁾。現在、T地区民家はA家とE家附属舎を除いて瓦葺きであるが、かつては全戸茅葺きであった。しかし、茅の葺き替えをする職人も材料も無くなったため、風雨によって茅がこれ以上傷まないように屋根の上にトタンを被せている。A家では約25年前にトタンを被せた。このような茅トタン屋根は清水町と美里町間の龍神街道沿いに今も点在する。また、N地区の民家はトタン葺きと瓦葺を主とし、スレート葺きもある。この地域は林業が盛んであったため、それ以前は全戸杉皮葺きであった。隣接する十津川村も杉皮葺きの石置き屋根で知られており、交流圏がうかがえる。しかし、杉皮葺き以前は茅葺きであったと記憶している人も多かった。確認できたのはF、I、K、Mの4家であり、来住歴と合わせてみると、比較的古い年代

表1 世帯主年齢

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
年齢〔歳〕	70代	50代	80代	83	55	78	78	80	77	70	70	65	80

表2 母屋建築時期

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
時期	江戸末期	昭和48年	昭和初期	昭和51年	大正期	明治末期	江戸末期	明治初期	江戸後期	平成4年	江戸末期	大正期	昭和中期

から住んでいる家が茅葺きであった。このことから、N地区でも林業が広まる以前は茅葺きが一般的であったと考えられる。

茅葺き屋根（当地方では「草や葺き」と呼ばれる）を残すA家夫妻の話によると、T地区では次のように茅の葺き替えがされていた。茅の葺き替えは葺き替えが必要となったときに急に出来るものではない。材料となる茅が大量に必要であるからだ。茅とは「屋根を葺くのに用いる草本の総称」(広辞苑)のことでチガヤ、スゲ、アシ、ススキ、ワラなどが利用される。T地区ではススキが主であった。秋から冬にかけて色づき乾燥したススキを刈り取り、小屋部分に蓄える作業が、農作業の少ない冬場の仕事となっていた。刈り取る量は一戸ずつのノルマ制である。大体50年足らずで葺き替えをするので、「今年は〇〇さんところ」という風に、地域で順番に行なわれた。葺き替えの家のために地域中が備蓄したススキを提供したのである。地域では棕櫚の生産も盛んである。棕櫚は非常に強固で腐敗しにくいいため、ススキの接合材料として重宝された。

また、N地区の皮葺きは次の要領であった。材料は主に杉皮で、檜皮の場合もある。木の皮が最も剥きやすい時期は夏である。ヘラを使って、約1mの長さに切られた丸太の皮を剥く。最も外側の外皮は利用せず、その内側のものだけを4、5枚重ねて屋根に置く。皮は軽いため、もちろん重石は欠かせない。石置き屋根は20年以上もつと言う。

4 間取り

近畿地方の日本民家の間取り型を杉本尚次は①四間取り(田の字型) ②広間の間取り ③妻入り形 ④並列型 ⑤土間極小型 ⑥変形 の6つに分類している¹⁵⁾。

これに基づいて対象家屋をみると、T地区の民家は概ね四間取りである。A家とC家の間取りからも明らかのように、とてもよく似ている(図2)。四間取りは田の字型とも呼ばれ、日本全国広く、特に近畿地方に分布している。四間取りには部屋割りが基盤目に整然と仕切られている整型四間取りとその仕切りを縦または横の一方を喰い違わせる喰違型があり、整型と喰違型は混在している¹⁶⁾。T地区ではオクナンド(ナンド・シンシツ)、ダイドコロ、カミノマ(オク)、シモノマが田の字に割り振られ、調理場はスイジバと呼ばれる。オクナンドとダイドコロの間にはクチナンド、スイジバとシモノマの間には接客空間として利用される部屋がある。C家は食違い四間取り、それ以外は整型四間取りであった。

B家とD家は昭和の後半に建て替えられた。間取りは以前のものとほとんど変わっていないとのことであったが、洋間の応接室を作り、スイジバの土間上げ(後述)をし、居住空間と接客空間を廊下で分断する中

廊下式にするなど、近年の住生活の変化に対応させる造りとなっている。また、B、D家の間取りはきわめて相似している。

次に、N地区の間取りは、土間上げなどの増改築も多いため、多様なものとなっている。F、G、K家は四間取りであったものを昭和30年頃に一部土間上げ改装をしている。H、J家は山に接近した地理上の特性から、部屋は並列型となっている。また、I、M家はその中間的な間取りで、イマが広い広間型の造りである。ナンド、オクはH家を除いてどの家にも存在し、調理室と食事室はイマ、ダイドコロ、カッテの3種類があり各家で呼び方が異なった。土間上げがされる過程で地域内でも相違が生まれたものと考えられる。

山間部の民家は一般的に、山の斜面の細長い土地に建てられるため、敷地の形状・広さの制約がある。こ

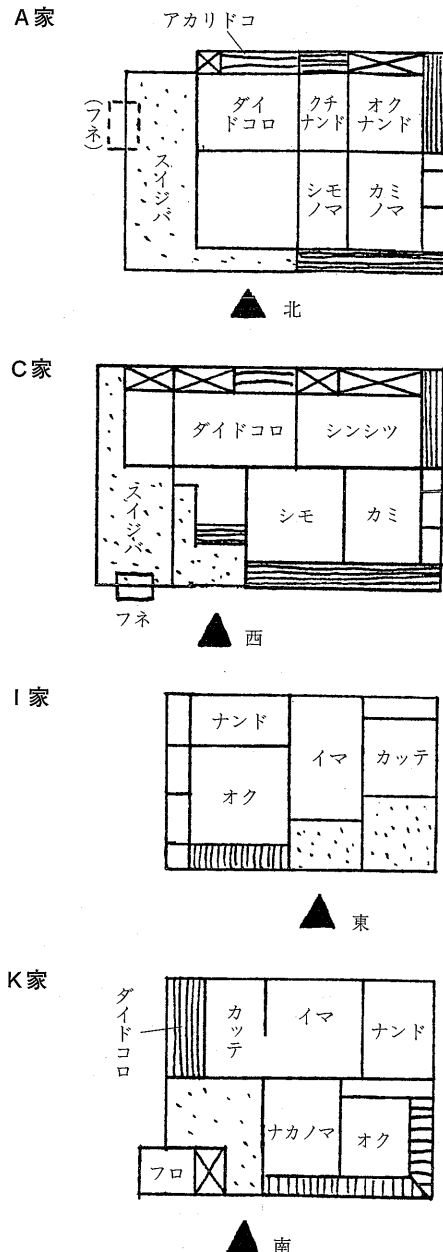


図2 間取り図の例 A、C、I、K家

のため、両地域とも、地形に合わせた家の造りとなっている。特にN地区では、山側に位置するナンドやオクが概して小部屋であり、奥行きの狭さが間取りに影響している。これは、屋敷規模や形式だけでなく、方角にも言える。伝統的農村住宅は、ハレの場である正面座敷は南向きの日当たりのいい方角に造られるが、両地区では、北や西向きなど敷地の位置によって様々な方角を向いている。

5 土間

土間部分の移り変わりであるが、言うまでもなく農家には広い土間空間が欠かせなかった。土間は炊事を中心とする家事の場であり、農作業の場でもあった。しかし、農業の衰退とともに各地で土間は床へと変えられていった。これを「土間上げ」と呼ぶことにする。土間上げは昭和30～40年代の農家住宅改善の典型例であり、例えば和歌山県のみかん農家についても明らかにしてきた¹⁷⁾。一般に、農家に比し、住まいの中に作業を持ち込むことの少ない林業、漁業は土間面積が小さいことが特徴である。林業を主としたN地区においても、土間は元々広くはなかったが、土間上げの時期も早く、昭和30年代に一斉に行われている。これに対してT地区では昭和50年前後に新築したB、D家を除く3戸は土間上げされていないスイジバである。この地方では昔、土間で牛も飼っていた。東北地方のような豪雪地域では、牛馬を土間で飼う曲がり家や中門造りが知られている。しかし、Aさんの話によると、この地域では牛が狼に襲われることがあるので人と一緒の家の中で飼育したということであった。

また、T地区のC家では、「アガリト」と呼ばれる空間が存在する。千森ら¹⁸⁾によると、アガリトは、紀伊山地の貴志川（真国川を含む）と有田川沿いの農家住宅の土間隅に多く見られる簡易な日常的接客空間で、ガイドコロが土間に張り出したものである。農作業場としての土間の使用頻度が減少したことや、ガイドコロの機能分化による部屋の確保の必要性が成立要因で、大正時代には確立されていた間取り形式である。C家の土間部分にみられるほかにも、B家の前住宅にもアガリトと呼ばれる場があったというが、N地区では全くみられなかった。このことから、有田川流域内の交流は盛んであったが、有田川流域と日高川流域との間の交流は少なかったことがうかがえる。

更に、先行研究のアガリト成立要因には示されていなかったことだが、B家の大奥さんの話によると、アガリトは養蚕のために増設された空間であったということであった。これは、A家が養蚕を目的として前土間を土間上げしたということと共通している。A家のこのスペースは、今は畳が敷かれているが昔は板の間だったことから、これもアガリトだったと考えられる。

6 設備

1) アカリドコ

A、E家のガイドコロに注目すると、「アカリドコ」と呼ばれるスペースがある。これは肘掛けの高さのトコ（床）で、トコの下は引き出しの物入れになっている。トコと外部の間には建具がなく、目の細かい木の格子だけである。トコと室内の間は障子で、昼間は室内に自然光が入るようになっていた。このため「アカリドコ」と呼ばれるようになったのであろう。ここは採光の役割と同時に、通気性が良く夏でも涼しいため、食物を置いておくのに都合がよく、冷蔵庫の役割も果たした。しかし、室内と外部を隔てるものは障子一枚しかないため、冬は寒かったに違いない。現在は障子ではなくガラス戸になっている（写真2）。

またアカリドコの下の物入れは、家族全員の箱膳を入れる場所であった。食事のときはここから箱膳を取り出し、食物を各自の食器によそって食事をし、終わればそのまましま込んだという。これは終戦前後までの話である。今もその名残で、食器を銘々の引き出しに片付けるというA家のような例もある。箱膳の利用はT地区とN地区の両方でみられたものであった。（箱膳については第2報でも述べる）

2) イモアナ

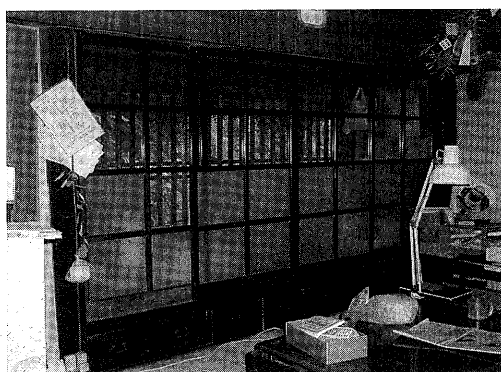


写真2 A家のアカリドコ

イモアナとは収穫したサツマイモを保存するため建物内外の地下に掘られた貯蔵穴で、全国的に見られるものである¹⁹⁾。土の中に食物を保存するのは竪穴住居時代から変わらない知恵であろう。土の中は外気の影響を受けた温度変化があまりなく、一年を通してほぼ一定の温度を保つ。よって、外気温の高い夏はひんやり冷たく、外気が冷たい冬は暖かいのである。この特性を利用し、冬中の食料であるサツマイモを保存した。サツマイモは寒さに弱いため、このように特別な保存を考える必要があったのである。穴の中にはワラやモミガラがたくさん敷き詰められてあった。これはサツマイモが直接土に触れて腐らないようにするため、そしてもちろん保温の意味もあった。

調査時、床下替えを行っている最中であったF家で

は、母屋の床下に巨大なイモアナの存在を確認することが出来た(写真3)。F家のイモアナは非常に大きく、はしごを使って出入りするようになっている。深さは約2m、面積は約2m×2mもあった。イモアナは、出入り口は1m四方程度だが、穴の底部分は広がっている。A家のイモアナでは軒下に作られ、中は人が余裕で入れる程度という。A家には、これ以外に、農作業場であるコナシヤの中にもある。調査でイモアナが確認できたのはこの2家だけであったが、多くの家で「イモアナがあった」ということが話に挙がった。イモアナは戦前から各家にあったが、特に戦時中は米の代替食物としてイモ類が1年を通しての食料となり、重要であったのである。

3) カマド

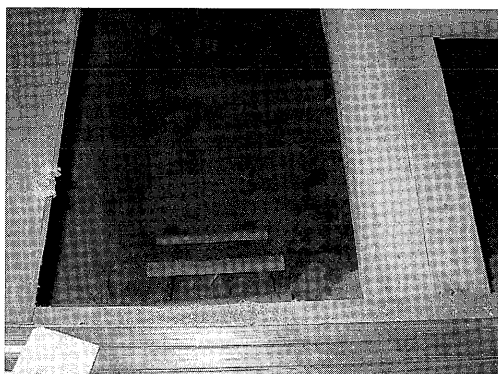


写真3 F家のイモアナ

農家では炊事と農作業の場として土間は重要な空間であった。作業の合間に家事をするため土足で出入り出来る必要があるのである。土間にはカマドがあった。昭和30年頃にカマドからガス式のコンロに変わり土間上げが進むが、A、C、E、F、Iの各家では今も土間の炊事場が残る。やはり土間のほうが作業効率の良いことから、そのままにしているのである。F家、I家では今もカマドが健在で使われていた。カマドは火力が強く、もち米を蒸す場合や筍を茹でる場合などには不可欠なのだという。

4) 暖—イロリ、ホリゴタツ、ムシロ

両地域とも温暖な和歌山県の中では比較的寒冷的な気候で冬は積雪するため、寒さへの備えが必要である。主な暖房設備はイロリであり、寒さを凌ぐためには欠かせなかった。本調査の聞き取りではA、B、D、F、H、I、J、K、L、Mの各家でイロリがあったという話が出た。これらは、家族が最も多く時間を過ごす、土間に続くダイドコロ（今でいうリビングとダイニング）にあり、第2の調理場としても活躍した。古い形式の残る由緒あるK家には、ダイドコロのほかにナカノマにもあったという。イロリの効用は暖、炊事、のほかに、建物の維持のためにも不可欠であった。B家

やD家の前住宅は築後100～200年で建て替えをした。この際、煤で真っ黒になった構造材がお目見えしたが、虫食いや老朽化がほとんど見られず、まだまだ使える材料であったという。

T地区では昭和30年頃、N地区はこれに約10年遅れてイロリは姿を消す。B家やI家はイロリにヤグラを置いてホリゴタツにしたという。コタツの起源についてはこれまでも、炬が進化したもの、と捉えられており²⁰⁾、この事例でもそのことが確認された。I家では、コタツの台（ヤグラ）は、当主のお手製ということである。現在ではイロリやホリゴタツは電気や石油のストーブに取って代わっているが、I家には今もホリゴタツがあり、赤々と炭火がいていた(写真4)。

和風住宅というと畳敷きの和室を思い浮かべるが、

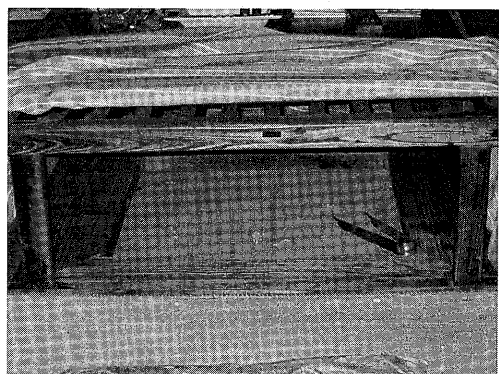


写真4 I家のホリゴタツ

元よりどの部屋にも畳が敷かれていたわけではない。平安時代の貴族の住宅様式である寝殿造りは板間から成っていた。畳は就寝場所や座る場にだけ敷かれる置き畳である。部屋の成立とともに畳を敷き詰めた部屋が広まったが、やはり一般民家では、材料であるイグサ調達の面からも板の間が多かった。調査対象の農家住宅では、畳を敷くのはハレの場、日だけであった。普段は板の間のままである。このため寒さを凌ぐために敷物も欠かせなかった。多くは藁のムシロであるが、N地区ではフトイ（太イ、イグサの一種。この地域ではガマと呼ばれる。）のムシロも利用したという。フトイは藁よりも柔らかく滑らかで、布のように模様を入れて織られていた。昭和26年にH家の奥さんが嫁いで来たときには各家にガマ田があったというから、どの家でも利用していたのであろう。フトイは上等の草履の素材ともなったそうである。

6 大工を請け負った人

住まいの建築あるいは増改築は誰がどのように行ったかといえば、ほとんどのことは地域内で協力し合い、自分たちで行った。先代、先々代の職業をお聞きすると「大工もやっていた」という返事が少なからずあった(A、H、L、Mの各家)。もしくは「近所の誰々さ

んがやってくれた」という話もあった。大工という職業が成り立つほど需要はないため、地域内の手先の器用な人が農業の傍ら請け負ったのであろう。林業が盛んであり、木を扱いなれていることも影響していると考えられる。特にN地区では各家がその家の、その時代の生活に適した住まい方を工夫していた。例を挙げると、母屋の土間部分に風呂が設置されていたK家、詳しくうかがうと「ワシが風呂場を作ったんや。」とのことであった。L家でも「風呂や便所はお父さん（夫）が手前で作ってくれたんよ。上手やないけど。」とどこか誇らしげであった。

結語

本研究は、生活の過程がみえる暮らしが今もなお残る和歌山県下の2地域を選び、住生活についてみてきた。以下に1報の内容をまとめる。

1) 対象地域

和歌山県下の山間部にあるT地区とN地区を対象に住宅調査とともに聞き取り調査を行った。両地域とも深い山間部に位置するため、比較的寒冷で多雨である。T地区は山椒生産を中心産業とした有田川上流域、N地区は林業地域であった日高川上流域に存在する。

地域の交流圏とはその地域を流れる川によって出ることが多いようである。川の流域ごとによく似た造りの民家が存在するという和歌山県内の研究事例もある²¹⁾。川が流れる→そこに沿って道が出来る→物が行き交う→人も行き交う（婚姻）→益々交流が盛んになる、というように川に沿って交流圏は出来やすいと言えるであろう。本研究でも、T地区は有田川流域、N地区は日高川流域の繋がりが見られた。

2) 居住者

家族人数は全国平均並であるが、世帯主年齢は13名中11名が65歳以上の高齢者であり、高齢者のみの世帯は9戸を占める。全国どの農山村にも言えることであるが、T地区とN地区も例に漏れず非常に高齢化が進んでいる。T地区対象家屋は山椒農家で、山椒生産は一時期停滞していたものの近年また盛んになりつつある。N地区では林業を生業としてきたが昭和30年代以降の林業不振によって農業へ転向した。林業不振は後継者の有無に大きな影響を与えている。

3) 住生活

母屋の建築時期は最古のもので江戸時代の文化文政年間に建てられた家であり、他にも江戸後半と伝えられる住宅が数戸みられた。

この地域の住まいはどの部分がどのように変化してきたか、増改築と建て替えからみれば、屋根材、土間を中心とする間取り、設備、の変化が著しい。このような住まいの変化は、材料調達面、気候への対応、時代背景、生業との関わり等が要因となっている。

屋根材は元来ススキなどの茅葺きであった。T地区には今も茅葺き屋根が残る。N地区では林業が盛んな時期、杉皮葺きであったが、それ以前は茅葺きだった。いずれにせよ材料は地域内で備えていた。

間取りは近畿地方を中心として全国的に農山村に見られる四間取りが主であった。しかし家々は山の急斜面にせり建っているため、並列型のものや、広間型のものもみられる。室の呼び名はナンド、オクは共通していたが、今で言うLDKの部分は2地域で異なっていた。T地区ではスিজバとダイドコロ、N地区ではカッテ、ダイドコロ、イマと呼ばれる部屋が存在する。

更に、設備面でも大きな時代変化が見られる。電気やガス、水道の普及、アルミサッシ等の建築材の出現によって室内の設備や間取りに変化がもたらされた。地域に特徴的な設備としては、アカリドコ、イモアナ、カマド、そして暖のためのイロリやホリゴタツ、ムシロが挙げられる。比較的寒冷で冬は積雪する両地区では冬の食料であるイモを大量に保存するイモアナは欠かせなかった。暖房設備としてはかつてイロリの存在が10戸で確認されており、2ヶ所にあったという例もある。イロリはホリゴタツ、電化製品へと変わっていくが、ホリゴタツが健在な家もあった。

また、住まいの建築や増改築は地域内で行う場合が多かった。特にN地区ではごく最近になってからも風呂や便所の改装は自分がした、という話をたくさんうかがった。

自分たちの手で生活を作り出すことを基本とするこのような生き方をこれからも伝えていってほしいものである。

参考文献

- 1) 和歌山県土木部都市計画課『和歌山県の都市計画』2002
- 2) 清水町誌編集委員会『清水町誌』上巻 1995・下巻 1998
- 3) 龍神村誌編集委員会『龍神村誌』上巻 1895・下巻 1987
- 4) 前掲書2)
- 5) 前掲書3)
- 6) 前掲書3)
- 7) 檜垣巧『和歌山県・龍神村の調査報告書』1998
- 8) 龍神林業開発会議『龍神林業』
- 9) <http://agress.envi.osakafu-u.ac.jp/ryujin-con2.html>
- 10) 清水町役場 <http://www.shimizutown.jp>
- 11) <http://homepage2.nifty.com/amanokuni/hani.htm>
- 12) 和歌山県企画部統計課『100の指標からみた和歌山 平成14年版』2002
- 13) 和歌山県教育委員会『和歌山県の民家』1969 p4
(文化庁『日本の民家報告書集成第12巻 近畿地方の民家2』東洋書林 1997 に所収)
- 14) 杉本尚次『近畿地方の民家』明玄書房 1969 p40
- 15) 前掲書14) p102
- 16) 前掲書14) p104
- 17) 宮本美智代「有田地方の『みかん農家住宅』について」1982
- 18) 千森督子・谷直樹「紀伊山地の農家住宅におけるアガリトの生活史的研究」日本家政学会誌Vol. 54 2003

- 19) 大館勝治・宮本八恵子『いまに伝える 農家のモノ・人の生活館』柏書房 2004 第48集 1998 p110
20) 拙著「暖房の生活史」和歌山大学教育学部紀要—教育科学— 21) 前掲書18)